

各関係機関団体の長 殿

各病害虫防除員 殿

福岡県病害虫防除所長

平成23年度病害虫発生予察注意報第1号について

注意報 第1号

このことについて、病害虫発生予察注意報第1号を発表したので送付します。

ヒメトビウンカ越冬虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、調査を行ったほとんどの地点で高く、一部地域では特に高い傾向にありました。今後、縞葉枯病が多発生するおそれがあるので、防除の徹底をご指導願います。

水稻

1 病害虫名 イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

2 発生地域 県下全域（特に京築地域）

3 発生時期 並

4 発生量 やや多

5 注意報の根拠（保毒虫率検定結果）

平成23年2～3月に県内16地点のほ場の水稻刈り株からヒメトビウンカを採集し、イネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率をエライザ法で検定した。その結果、保毒虫率は平均12.6%で、保毒虫率が高くなり始めた平成15年からの8ヵ年平均6.8%よりも高く、前年の平均9.8%よりもやや高かった。また、平成21年及び平成22年の平均よりも高かった。特に、京築地域の保毒虫率が高かった（表 地点番号14～16）。

今後のヒメトビウンカの発生量によっては、縞葉枯病が多発生するおそれがある。また、平成7年以後、保毒虫率は毎年上昇傾向にあり（図）、防除の徹底が必要である。

6 防除上注意すべき事項

- （1）越冬世代成虫は小麦や越冬地付近のエノコログサ、イタリアンライグラス等のイネ科植物に移動し増殖するので、雑草防除を行い発生密度の低下を図る。
- （2）水稻苗への本種の飛び込みを防止するため、イネ科雑草が繁茂した場所や麦類作付は場付近での育苗を避ける。

(3) 前年度、本病が多発生した地域では、移植時期を可能な限り遅らせる（麦収穫後の6月10日以降）とともに、ヒメトビウンカに効果のある箱施薬剤を施用する。

(4) ヒメトビウンカの第1世代成虫は5月中旬頃から羽化し始める。麦の収穫とともに麦ほ場から水稻へ移動するので、5月下旬～6月上旬移植のほ場では移植直後から成虫の発生に注意し、水稻ほ場で発生が多い場合は防除を実施する。

発生時期は、平年並みと考えられるが、ヒメトビウンカやイネ縞葉枯病の発生状況を予察情報等で提供するので参考にする。

表 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率

番号	地点名	保毒虫率 %		
		平成23年	平成22年	平成21年
1	宗像市朝町	8.5	9.6	7.4
2	筑紫野市吉木	6.4	4.7	8.5
3	久留米市太郎原	0.0	4.8	4.3
4	うきは市浮羽町山北	5.3	13.8	11.7
5	朝倉市菱野	16.0	5.3	9.6
6	嘉麻市中益	11.7	4.3	5.3
7	添田町中元寺	19.1	1.1	8.5
8	筑後市馬間田	5.3	3.2	3.2
9	大川市北古賀	1.1	5.3	6.4
10	みやま市瀬高町堤	8.5	5.3	4.3
11	黒木町木屋	1.1	4.3	5.3
12	岡垣町黒山	10.2	5.3	5.3
13	遠賀町木守	12.8	8.5	—
14	行橋市辻垣	35.1	30.9	10.6
15	豊前市荒堀	21.3	24.5	—
16	みやこ町勝山	39.4	26.6	21.3
県下全域(番号1～16)		12.6	9.8	8.0
平均 京築地域(14～16)		31.9	27.3	16.0

注1)平成23年の検定虫数は、岡垣町黒山が59頭で、他の地点は94頭。

注2)平成21年、22年の調査地点2は大宇柚須原、7は大宇落合、他の地点は変更なし。

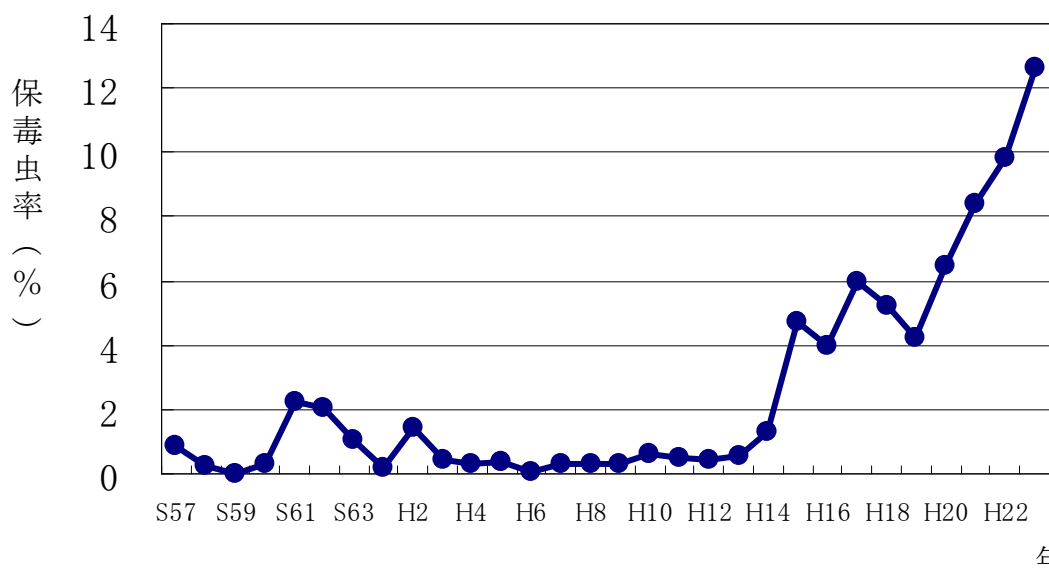


図 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移